

令和2年度 第1回千葉市立博物館協議会議事録

1 日 時：令和2年8月26日（水） 午後1時30分～3時30分

2 場 所：千葉市立郷土博物館 1階講座室

3 出席者：（委員） 委員長他 4人出席

委員長 萩原 司
副委員長 小島 道裕
委員 広田 直行
委員 鈴木 一彦
委員 由利 知子

（教育委員会）

生涯学習部 佐々木部長

同部文化財課 佐久間課長、森本主査

（事務局）

同部加曽利貝塚博物館 加納館長、後藤副館長、長原主査

同部郷土博物館 天野館長、芦田副館長、錦織主査

4 議 題

- (1) 令和元年度の事業報告
- (2) 令和2年度事業予定と実施状況について
- (3) その他

5 議事概要及び議事結果

3 議 題

- (1) 令和元年度の事業報告

令和元年度の加曽利貝塚博物館及び郷土博物館の事業報告について説明し、各委員の同意を得た。

- (2) 令和2年度事業予定と実施状況について

令和2年度の事業予定に対して、現在の実施状況について説明し、各委員から意見が出された。

- (3) その他

文化財課より「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画」の検討状況について説明し、各委員から意見や要望が出された。

6 会議経過

錦織主査の司会進行により、佐々木部長の挨拶、新任の由利委員の紹介と挨拶、関係職員の紹介を行った。

その後、会議資料の確認及び運営規則第3条第3項の規定により、この会議が成立していることを告げた。また、千葉市情報公開条例25条に基づき会議を公開してい

ることを告げ、以後、萩原委員長を議長として、会議が進行した。

議事（１）令和元年度の事業報告

< 説 明 >

加曾利貝塚博物館及び郷土博物館から、令和元年度の事業報告を行った。

< 質疑応答等 >

萩原委員長 ただいま、事務局より説明があったが、質問や意見などがあつたらお願いしたい。

鈴木委員 コロナ禍の中でもあるのでお聞きするが、加曾利貝塚博物館のトイレに手洗い場はあつたか。

加納館長 博物館入口脇の外にあるトイレであるが、男女ともトイレを出たところ設置されている。

鈴木委員 以前に男性用トイレを使ったときに見当たらなかつた記憶があるのだが、あればよい。

萩原委員長 他に何か意見はあるか。なければ次の議題へ移る。

議事（２）令和２年度事業予定と実施状況について

< 説 明 >

加曾利貝塚博物館及び郷土博物館から、令和２年度事業予定と実施状況について説明した。

< 質疑応答等 >

萩原委員長 ただいま、事務局より説明があったが、質問や意見などがあつたらお願いしたい。

広田委員 昨年度、今年度と事業がルーティンになっているようだが、市民の方々へ広報はどのように行っているか。

加納館長 加曾利貝塚博物館では、従前のおり市の広報誌やホームページで広報を行っている。ただ、今年度難しいのはどこまで「来てください」と前向きな広報をしてよいのかという点である。正直、試行錯誤しながら行っているところである。

天野館長 郷土博物館も市の広報等で広報することは同様であるが、当館では本年度からホームページを大幅にリニューアルし、以前より使いやすい形になった。また、Twitterの更新を増やしている。他にすそ野を広げていくことが

大事だと考えてホームページ内の「館長メッセージ」や「研究員の部屋」で多彩な話題を取り上げている。本館の活動を通していろいろな方面に興味を広げてもらいたいということである。さらに、これは今後になるが、エドゥケーターの活動として、学校における出前授業の指導計画案や子供たちが団体に利用するときの学習シートなども教育活動というコンテンツのなかに掲載する予定である。学校とも協力しながら、本館だけで完結するのではなく、学校での事前学習や事後のまとめに活かせるものにしていきたいと思っている。

小島委員

実施予定の事業に異論はないが、コロナウイルスの影響が困ったもので、私も同業として何かいい知恵はないかと思っている。正解があるはずもないが、従前通りのことがなかなかできないし、このままではじり貧になってしまうのが見えている。何か新しい方向性を出していかないといけないと思っている。それが何なのかというのはまだわからなくて、試行錯誤するしかないのだが、一つは今あったホームページのような媒体の充実。今回、非常に充実して良くなったと思うが、来館しなくても利用していただける機会を増やしていくという方向がある。その他に、まだ進行形の事態の中で、こういったことをやってみようとか、やったらどうかなどと考えているものはあるか。

加納館長

加曾利貝塚博物館は幸いにも現在新しい博物館に向けた動きがあり、それに向けてという点でこれまでとは異なる新しい事業ができています。例えば資料にある「特別講座 考古学研究の最前線」は研究者向けの講座を一般にも開放するという形で実施した。これは新しい博物館の開館に向けて、外部の研究者を招聘し、協力関係を築く姿勢を示すという意味があった。これは考古学会の中でも注目されたのではないかと。また、次ページの「縄文時代研究最前線」も新規に実施する。これまで縄文時代研究講座で、一般市民に向けて分かりやすく縄文時代の研究成果を話す機会があったが、新博物館に向けて市民学芸員であるとか、様々な市民を巻き込んでいくあたり、従前よりもワンランク上の、上級者向け講座として開催する。コロナと直接関係は無いが、新博物館に向けてこうした新しいことが出来ている。

天野館長

確かに、色々やってもこれでよいのか忸怩たる思いで進めている。幸い文化財課で予算措置をしていただき、博物館の中でどのようなものを展示していて、どのようなことが学べるかという映像コンテンツの作成を現在進めている。他に鎌倉騎馬武者体験についても従前のやり方では今年実施できないので、映像で撮影して、ホームページで公開することを検討している。千葉大学と共催の千葉氏公開市民講座についても大学の会場が使えない可能性が高いため、できるかどうかかわからないがズームなどを使い、リ

アルタイムに配信するようなことも検討したい。

他に市史編さん事業の中で、千葉市の歴史読本を編集し、次年度に刊行する予定がある。千葉市は小学生や中学生向けの副読本はあるが、一般向けのものが無かった。それがようやく実現し、市民が興味を持って本市の原始から近現代までの歴史を学べる 250 頁程度の本の編集を進めている。読み物として面白い本をつくって少しでも千葉市の歴史について興味関心を広めていこうということである。そうしたことを地道にやっていくしか無いと思っている。

小島委員

とにかく人を集めることが、難しい状況の中で、人数的な量の拡大はまず無理である。量がだめなら質に行くしかないというのが一つの方向性だと思う。研究は博物館本来の機能だし、研究をしっかりと、映像も含めたコンテンツを揃えていく。そういう事業こそが本来の役割だと考えを変えなければならないと思っている、両館長の話を心強うかがった。もう一つは私自身も 4 月～5 月中はほとんど在宅勤務で、自宅で巣ごもり状態であった。生活も一変するなかで、自然に自分の住んでいる場所の周りに関心が向くようになった。気分転換で散歩に出るのはだいたい半径 2 km の範囲である。縄文の集落がだいたい 2 km ごとにあるという話を最近読んで、私は縄文人と同じ生活圏にくらしているのかとふと思った。そういう視点で自分の地元を見直すと、いろいろ見つかって面白い。田んぼだってそれこそ弥生時代からあるのではないかと思うし、中世には確実にある。実は半径 2 km の中で歴史が描けるということが分かってきた。今郷土博で行っている六方野の展示は具体的な村絵図を使っていてよいと思うが、そうした非常に具体的な村レベルの話に関心が向きつつあると思う。もう一つマイクロツーリズムという話をよく聞くようになって、それも似たような現象だと思う。遠くにいくことははばかれるし、嫌がられる。そうであれば地元に関心が向く、その中で郷土博物館の役割が求められるのではないか。それがヒントになって新しい今までとは違うものができるかと考えている。

広田委員

今 WEB 上のコンテンツの話があったが、大学の授業も現在ほとんど WEB 上でやっている。一方で学祭であるとかオープンキャンパスなどの行事は中止されているが、代わりに来年以降も使えるような動画を作っている。今ホームページを見たらむかしの遊び体験などの行事があるが、これを昔実際に遊んでいる様子の動画を作り、来年以降子供たちが実際に見て体験できるようなコンテンツをそろえるとよいのではないか。

鈴木委員

先ほど出たエドゥケーターについてであるが、今回入ったのは学校の教員だった方か。

- 天野館長 小学校と中学校の教員 OB の方である。
- 鈴木委員 先ほど鎌倉騎馬武者体験の動画を作成するということがあったが、これは鎧を着用するようなシーンを動画にするということか。
- 天野館長 そうである。鎧を着用して実際に馬を操るところまでを馬術協会の方と協力して動画にまとめる予定である。
- 鈴木委員 先ほどの広報の話とも関係して、こうした動画をサイトにアップすると愛好者などによってキーワードで検索され、郷土博物館として検索されなくても、騎馬体験部分が見られることで博物館の広報になると思う。こうしたものは強力なツールだと思う。それと関連して例えば火縄銃やむかしのあそび体験や鎧づくりなども動画にできればと思う。
- 天野館長 今年一度にはできないが、追々考えていきたい。
- 鈴木委員 エducatorの方もいるので学校の先生が使える教材として考えると活用される機会も増える。海外では学校の先生が使うための教材を博物館が作成することがよくある。冊子の場合もあれば動画の場合もあるが、それらをコンテンツとして提供している。そうしたことを意識して作ると使ってもらえるのではないか。
- 天野館長 つまり、ただ動画を見て終わるのではなく、それを資料として、考えさせる材料にするとか、どのように活用できるのかを雛型のようなもので示したりするということか。
- 鈴木委員 そういうものがあれば非常によい。もっと言えば何年生で使えばよいかを示したものがあればよい。
- 由利委員 この状況の中で工夫されていることがわかった。博物館の役割、目的は何で、今年度何を目標に運営しているのかとか、来館者を増やすことが目標なのか、学校教育に寄与していくことが目標なのかとか、何が目標でそれに向けてどのような手立てをして、実際どうだったのかなどが報告資料に示されているとありがたかった。今、話のあった教員が使えるようなコンテンツについては提供してもらえれば学校も助かると思う。学校と連携していくために今後も校長会など色々な場で広報していただけたらいいと思う。
- 萩原委員長 他によろしいか。ではたいへん困難な状況の中ではあるが、たいへん前向きな発言が多く、両博物館にとって参考になることが多かったと思う。で

は、次の議題に移る。

議事（3）その他

< 説明 >

佐久間文化財課長より「特別史跡加曾利貝塚新博物館基本計画」の検討状況について説明した。

< 質疑応答等 >

萩原委員長 ただいま、事務局より説明があったが、質問や意見などがあつたらお願いしたい。

広田委員 前回、県立図書館の計画の進め方について話をしたが、そこで博物館も国立、県立、市立の位置づけについてしっかり把握したほうがいいという話をしたが、今回報告資料2があることによって随分わかりやすくなっていると思う。また、報告資料3でビジョン・ミッションをまとめていただいた。これによって施設を運営する職員や行政内部の人々に理解してもらうときに管理運営のベクトルをはっきり示すことができる。そういった意味では博物館としての整理はだいたいよいのではないかと思う。一方、先ほど報告された博物館の諸活動では、図書館や公民館との連携が随分行われているように感じた。市として社会教育施設がどのようなビジョンやミッションを持っているかということを確認することによってさらに博物館の位置づけが明確になるのではないか。もう一点今回の資料の中で住民との交流ということが機能、役割として示されているが、単独施設としての交流というのは難しいと思うので、せつかく生涯学習部管轄の施設となるのであれば3つの生涯学習施設が連携して交流を促す仕掛けを作れば良いのではないかと感じた。

鈴木委員 素案を拝見した。何点か気づいた点を伝えたい。まず、素案7ページに「利用者層の再検討」とある。ここにある高校生、大学生、社会人が最も難しい。特に高校生はよほどの魅力がないと来ない。今後どうやって魅力を作っていくかが課題であろう。次に9ページのSDGsであるが、博物館は基本的にSDG4がメインだと思っている。ここにたくさん並べているが、ここに入れていいのかと思うものもある。例えばSDG9は意味合いを詳しく見ると途上国のインフラ開発などが中心となる。ここはもう少し詳細に何が目標として示されているのか、SDG9-1、9-2などの個別目標もあるので、そのどれに対応するのかを検討する必要がある。あとSDG6は「安全な水とトイレを世界中に」というと唐突感があると思う。「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」という訳もあるので、どの個別目標にあてはまるのかを示すよう、少し見直した方がよい。次に13ページだが、事業活動の全体像をわかりやすく示している

が、下の「調査・研究成果を基盤に展開する事業活動」の部分はかなり独創的な書き方をしている。「展示・体験」「教育・普及」「集客・交流」の3つあるが、それぞれを2つの漢字で表現するには無理があるのではないか。例えば「展示・体験」の展示は博物館側がすること、体験は来館者が感じるもので、そもそも方向が違う。上の「調査・研究」「収集・保存」はすべて博物館側の活動なので、ズレがあるとおかしくなる。他に言い換えがあるかという2文字に収めるのは難しい。例えば「展示・体験提供」などにしないと日本語としてどうなのかという疑問がある。次に「教育・普及」であるが、これは以前にも議論になったと思うが、教育普及という言葉は一方的な印象があるので、現在博物館の現場ではあまり好まれなくなってきている。ここは学習支援とか育成といった言葉を使った方が意味合いが近いだろう。博物館の部署としては教育普及という言葉が今も使われているが、活動内容としては学習支援になってきているので、計画に入れるときはそうしたことも加味する必要がある。また、「集客・交流」という言葉であるが、集客という言葉が博物館には馴染まないという考えの人が多くはないか。ここは広報とかコミュニケーションの意味で、もっと言うとマーケティングなのだが、書くとしたら「広報・コミュニケーション」くらいが自然かと思う。集客は確かにしなければいけないのだが、商業的なイベントの集客とは意味が違うので、かなりチャレンジングな表現になると思う。次に15ページ、「事業活動の展開」にある研究テーマだが、従来と変わらない感じがする。SDGsを出したくらいなので、環境や災害などと関連付けた特色のあるテーマを出していった方がよい。17ページの展開案には、探求型、没入型、対話型の3つがあり、これはよいと思うが、最後の対話型展示が運営面で非常に難しいのではないかと。通常博物館にいる専門職員だけでは手が回らない可能性があり、しかもかなり特殊能力が必要である。ナビゲーションをして、司会をしたり、モデレーター役をしたり、そうした特殊な才能がないとできない。こうした対話の場を作っていくのはたいへんである。また、参加者数のキャパシティとしては探求型、没入型、対話型と順に減ってくる。対話型は、実際にはワークショップルームなどの別室でイベントとしてスケジュールを組んでやることになるのではないかと思う。最後に施設の関係だが、28ページについて、学芸員・研究員がどのくらいの人数になるかまだ決まっていなくてもよいが、その方々のスペースは十分に確保する必要がある。学芸員はもちろん、エデュケーターにも執務室が必要だが、教育部門のところは執務室の記載がない。学芸員と一緒にでもよいが、執務室の確保を考える必要がある。他に縄文人に扮したキャストがたくさん出ることになっているが、そうした人の着替えや休憩の部屋をどうするのかも考える必要がある。以上である。

小島委員

13ページの集客は博物館用語としてちょっと違和感がある。コロナの時

世でもあり、むしろ集客に代わる活動を模索しているところなので、ここは一番違和感があった。あと、人の問題が一番大きいと思う。結局活動を担っていくのは人で、単純に言えば学芸員を何人増やせるのかということにかかってくる。いくら立派な計画を作っても運営していくのは人なので、優秀な人がいなければ、程度の低い仕事しかできないことになる。これから人を採用していく計画の中で、学芸員や教育スタッフなど何人ぐらい確保する予定なのか、考えがあれば教えてほしい。

佐久間課長 具体的な人数などはまだこれからであるが、少なくとも現状よりは増やしていかなければいけないと考えている。

小島委員 いろいろ組織体制などを考えていると聞いて了解したが、結局はどういう人が何人でこれを担うかということだ。いろいろ計画があるが、JOMONIAとか未来ラウンジとかの計画はどこから出た発想なのか。

佐久間課長 加曾利 LAB のオープンラボについては、類似の先行事例がある研究者目線でのものである。2つ目は誤解を恐れずに言えばテーマパーク的なもので楽しんで学べる施設である。3つ目の未来ラウンジは、今討論を通じて知識を深めることが求められているので、みんなで話し合っ、自らの生活に活かせるようなことを自分なりに吸収していただく場とする。以上の3段階で考えている。

小島委員 コンセプトとしては悪くないが、絵に書いた餅になりがちなので、実際にそれを担う学芸員を早く採用して、その人達の中でどう具体化していくのかを考えた方がよい。業者に考えさせるとお金を使うことばかり考えてしまうので、建物より先に人がいないとだめだと思う。そうしないと中身を伴わない建物になってしまう。コロナ後の社会、新しい生活様式の中で、やはり基本方針が変わってくるところがあるのではないか。先ほども言ったが、地域への関心はこれから確実に高まるので、地域博物館としての役割を充実させる点がもう少し出てきてもいいのではないか。加曾利貝塚は特別史跡で貴重なものなので、特別であることは間違いないが、ここが特別で日常の生活とは全く別ものだとしてしまうとかえって地域博物館の役割にならないと思う。我々が巢籠もりを経験してわかったのは、自分の住んでいるところは面でできていて、これこそが地域だということだ。皆がその実感を持ちつつあるのではないかと思う。私も半径2kmの中で食料を調達するにはどうすればよいかを時々考えるが、それこそがある意味没入体験だと思う。特別な場所に来て、特別なことをしないと歴史を経験できないのか。そういった方向に行ってしまうとそれは間違いだと思う。逆に自分たちが住んでいる場所がまさに縄文時代以来の生活の場所であって、その中でくらすということがどういうことなのかを考える場になって

いくのが、巢籠もり以降の博物館ではないかと思う。だから加曽利だけではなく、加曽利を学ぶことで自分の住んでいる地域についての歴史的な感覚を持つ場にしなければいけないのではないか。基本方針だけ見ていると特別な場所で特別なことをして特別な知識を学ぶという方向になっている気がする。そうではなくて我々の実際の生活に根ざした歴史感を身につけられる場所という方向で考えて、それこそが SDGs である。今後はそうした方向に関心や求められるものが確実にシフトしていくと思ってる。以上、感想である。

鈴木委員 一つ補足させてほしい。建築が先走ってしまうことが博物館の場合よくあるので、学芸員や専門スタッフなどがある中で設計をしていくことが重要である。建築家の方にとって博物館や美術館の設計は夢であるとも聞くが、学芸員などとのコミュニケーションがよく取れていないと、実際に使うときに不便なものが出てしまうことが少なくない。先程小島委員からもあったように、準備室を作り、人をある程度確保しないと使い勝手の良いものはできない。加曽利貝塚の場合には既に博物館があるので、専門家はそこにいるのだが、建築が独り歩きしないということは重要である。

小島委員 基本計画はこれでよいが、準備室は決定的に大事なので、早く準備室を立ち上げて、スタッフを揃えてその中で具体化していくことが必要である。

萩原委員長 だいぶいろいろな意見が出たが、これらを踏まえて計画の策定を進めてほしい。他に事務局からなにかあるか。

天野館長 次回の日程は3月の中旬頃を予定しているので、後日調整をさせてほしい。また、現行委員の任期が1月8日で切れるが、事務局としては現委員の方々に引き続き委員をお願いしたいと考えている。後日、改めて依頼の手紙をださせていただく。

萩原委員長 他に何かはあるか。なければ、本日の議事はここで終了する。

錦織主査の進行により、令和2年度第1回千葉市立博物館協議会を終了した。

問い合わせ先 千葉市立加曽利貝塚博物館
TEL 043-231-0129
千葉市立郷土博物館
TEL 043-222-8231